

環境大臣賞（優秀賞）

ふるさと

福島県 大熊町立大熊中学校 二年 齋藤 真緒

あれから三年。私は第二の古里である会津で元気に生活している中学二年生です。地域の方の優しさと温かさに見守られ、あの恐ろしかった光景は私の心から少しづつ忘れかけているように感じます。

私は、あの日までは将来のことなど何の不安も感じず、美しい水に囲まれ幸せに暮らしていました。海や川のきれいな水では、たくさんの人が泳ぎ、魚たちも躍るようにとび跳ねていました。そして、私たちが毎日口にしていく水もガラスのように透き通っていて、味もほんのりと甘く、とてもおいしく幸せでした。私はそんな大熊町の水が大好きでした。

三月十一日のあの瞬間、私たちはその水から突き放されたのです。蛇口からは水が一滴も出てきませんでした。避難先でもジュースのみで水を口にすることはありませんでした。私の前から水は消えてしまったのです。

そうになると、人間とは思議なもので水を飲みたい、という欲求がますます強くなり、今まで感じたことのない不安が私の心を支配したのです。しかし、日にちが経つにつれ、私はもう一生水を飲むことができないかもしれないという絶望感で悲しくなり、あきらめかけた時もありました。

数日後、私たち家族は叔父の家に避難することになりました。ちょうど夕食時で、空腹だった私たち家族は、香ばしい香りにほっとしたのです。机の上にはカレーライスと水が置かれていました。私が夢にまで見た水との再会に、私は踊り上がって喜びました。私は嬉しくて、水を手にとると一気に飲み干しました。思わず、

「あー。おいしい。幸せ。」

と叫んでいたのです。もう飲めないかも、と思っていた水を存分に味わいました。その水も大熊町の水のように、ほんのり甘く柔らかで優しく、自分が生きていることを実感でき涙がこぼれてきました。

私は会津に来てから知った言葉があります。会津のように雪深い地方では、雪に対して「克雪」「親雪」「利雪」という言葉があるそうです。この言葉を水にも使えないだろうかと考えてみました。「克水」「親水」「利水」という言葉です。「克水」は、あの大暴れする海や川を堤防やダムを築いて災害に備えます。「親水」は、水を敵とみるのではなく、友達と接するように、水の言葉に耳を傾けながら、こちらからも水と仲良く付き合っていくことです。「利水」とは、すでに生活用水、農業用水、工業用水、発電用水等に利用されていて、新しい可能性が見出し出していけると考えます。

私は、あの時から水の大切さを考えるようになりました。今まであまりにも近くにあり、感謝の心を忘れていた自分をみつめ直すことができただのです。水は命と同じように尊いものです。地球を宇宙から見ると、真つ青です。地球はこの壮大な海があるから成り立っていて、私たちは水の恵みを受けて地球で幸せな暮らしができるのです。乾いた大地をいやしてくる水。私たちの傷ついた心をうるおす水。水は生き物全てに命を吹き込んでくれるものです。だから私は、命の恩人である水を、未来の子孫たちにも輝いたまま残す責務があります。

私たちの大熊中学校校歌にこんな一節があります。「呼べばこたえる太平洋。紫金かがやく阿武隈や。流れて清き熊川や。わが古里は幸多し。」壮大な海の美しさ、きらきら輝く阿武隈の山脈、清らかな熊川など、今は見ることができません。しかし、何年経っても私たちの古里は大熊町です。あの三月十一日の出来事は思い出したくない気持ちです。しかし、私たちが忘れてはいけないことも事実です。今は、私たちの古里にたくさんさんの幸せが戻ってくることを願っています。